
Ghost buster ! ! !

桜藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G h o s t b u s t e r ! ! !

【Nコード】

N 1 1 3 2 0

【作者名】

桜藍

【あらすじ】

「退学なんて、御免だっつー！！！！」 都内に住む少年は、自分の人生を恨んだ。主人公『源川輝二』は腐れ縁にあたる少年『紀州暁』が云った「退学して♪」の一言によって、何故か廃校寸前の高校に転校させられてしまう。其処で出会った人々は、個性豊か過ぎる生徒がいて・・・！？そして、主人公の『未知なる力』が目覚める・・・！！ バトルあり、笑いあり、恋愛あり、BLありっ！？少年少女達の新しい物語が今、始まる！！

プロローグ（前書き）

プロローグ完成ですっ!!
駄文ですが頑張ったので、温かい目で読んで下さいっ!!!!

に生まれ変わる呪い。

プロローグ（後書き）

初めましてっ！！桜藍^{おうらん}と、申します！

駄文過ぎる小説ですが、如何かどうか温かい目で読んで下さい！！

（と云つても、まだプロローグですが・・・（汗）

では、感想等ありましたら一言でも宜しいので、送ってくださいっ！！！！

其れでは、次の話で会いましょう♪

#1 『何時もの日常が、狂う直前』(前書き)

一話完成です！

其れでは、どうぞ！！

#1 『何時もの日常が、狂う直前』

「おい、早く部活行こーぜ！」

「ねえねえ！此の後、何時ものメンツでカラオケいかね！？」

「粕川あゝ、今からゲーセン行くか？其れとも、N校の生徒ナンパするかっつー！」

都内に在る、とある高校。ホームルームが終わり、先生が行くのと同時に生徒達は其々の放課後を過ごそうとしていた。

窓側の一番後ろに座っている生徒も、其の一人。

「（・・・今日もつまねえ一日だったな）帰るか」

「源川！みなかわ今日も部活行くよな？」

「あつ悪い・・・今日は、用があるんだ」

「そつか。じゃっ、また明日な！！」

「ああ、またな」

源川と云う少年は男子生徒の誘いを断り、一人スタスタと歩いていった。

少年の名は、源川輝二。ひかり普通の人生を送っている、高校二年生。

（何時もと変わらない日常・・・何時もと変わらない風景・・・

。俺は、何のために生きているんだ？)

少年こと源川は何時も通る廊下でふと、考えていた。此れも源川にとっては何時もの日常にしか思えていなかった。

「みつ源川君！」

「んっ？」

「じっ・・・じゃあね!!」

「・・・ああ、またな」

源川は少女達の顔を見て、ニコリと微笑んだ。

「良かったじゃんっ、クルミ！」

「うんっっ!!」

少女達は、やや顔を赤らめながら其の場から、離れていった。しかし、源川にとっても此れは只の何時もの日常にしか思えなかった。

「・・・くん・・・輝二君」

「・・・・・・暁？」

だが、源川の日常は『暁』と云う人物に出会い、何時もの日常が

#1 『何時もの日常が、狂う直前』（後書き）

やっと、書き終わりました!!

つか、内容身近つつ!!?御免なさい!!.....!!

こんなんでも、楽しんで頂けたら幸いですつつ!!.....!!
誤字等ありましたら、お願いしますつつ!!

#2 『君の一言で、人生は大きく変わったんだ・・・』 (前書き)

二話完成ですっ!!
其れではドウゾ♪

#2 『君の一言で、人生は大きく変わったんだ・・・』

「・・・暁？」

源川は知り合いと思われる人物の所まで、外靴を履きながら早歩きで向かって行った。

「あつ、覚えててくれたんだね。嬉しいよっ!!」

「いやっ・・・まあな（汗）」

源川は暁と云う名の少年の顔をあまり見ない様に、適当に返答をした。

学校の生徒達は、何時も見せない源川の表情に内心驚きを隠せなかった。

「輝二君とはもう十年も会ってないんだね。元気にしてた？輝二君、髪も背も随分と伸びたね」

「そりゃあ伸びてなきゃ困るっつーの。てか、好い加減其の喋り方止める。高二的男子が云う言葉じゃねーだろ」

（（男かよ、そいつつつっ!!!!!!??））

源川の言葉を聞いた生徒達は、自分の目と源川の言葉を疑った。そう思うのも、無理は無い。

暁の背丈は中学生に見られても可笑しくなくらいの大きさで、しかも顔立ちは真ん丸お目目の銀縁眼鏡、そして小学校低学年が使

いそうな口調だ。何処かの少女と見間違えても無理は無い。

生徒達は二人に興味津々になり、二人の会話を聞こうと立ち止まっていた。

「・・・暁、取り敢えず少し歩くぞ」

「何で？」

「俺が人前で話すの苦手なの、知ってるだろ」

「・・・ちえつ、分かったよ・・・」

暁は渋谷源川の提案に乗ると、源川の手首を掴みスタスタと正門まで歩いて行ってしまった。

- - - - -

「ふう・・・此処まで来れば良い？」

「ああ、サンキュッ」

高校から少し離れた所にある公園で、暁は源川の手首を離れた。

「ところで暁、一体如何したんだ？むざむざ態々二・三時間も掛けて此処まで来るなんて」

「そーだっ！今日はね、輝二君に用があって此処まで来たんだ

」

暁は満面の笑みで、源川に向かって微笑んだ。周りから見れば至って可愛らしい微笑だが、源川にとっては悪魔の微笑みにでも見えたのか、引き攣^ひった顔をしていた。

「あのね、輝二く「スストップッ！！！！」」

「何さ。僕に口出しするなんて、良い度胸だね？（黒笑）」

「…………えつとお…………。あのな、暁が此処に来る時は大抵不幸がやって来るて思っ^っのは、気のせいか…………？」

「気のせいでしょ」

（気のせいじゃねーんだよっつ！！！！！！（泣））

源川は過去に遭った出来事を思い出しながら、必死に訴えていた。相当、昔から嫌なトラウマを抱えているらしい。

「話は戻して。あのね、輝二君」

ゴクリッ…………。

少し間を空け、暁は重大な事を平然と軽々しく言い放った。

「退学してっ」

(・・・・・・・・・・・・・・はい?)

此の暁の発言により、源川の運命の齒車は大きくずれ始めた。

#2 『君の一言で、人生は大きく変わったんだ・・・』 (後書き)

どーも、桜藍です!!

文が纏まってなくて、本当すいませんっっっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!

(汗)

こんな小説でも読んでくれたら幸いです♪

感想・誤字等有りましたら、お願いしますっっ!!

#3 『俺は自分の人生を、恨んだ・・・』

「・・・・・・・・暁、今何だった？」

源川は暁の言葉を理解出来ずにいた。

「もつつ輝二君たら、分かてるくせに」

「分かりたくないから、聞いてんだろつつ！！！！（泣）」

いや、只単に分かりたくなかったらしい。

「しょうがないなあ。もう一回云ってあげるよ」

「やつやっぱ云うなつつ！！！！！！」

「輝二君、一体何したいの・・・」

源川のやや可笑しな言動に、暁は困り果てていた。

「てか、暁。行き成り来て『退学して』なんて云つか、普通」

「輝二君。僕、普通じゃないの・・・知ってるよね（黒笑）」

「勿論で御座います」

源川は暁の目を咄嗟に反らした。

過去の二人にどんな過去があったか知らないが、少なくとも普

段のクールな源川とはかけ離れているのが分かった。

「じゃ、早速荷物纏めないとね」

「おい、暁！」

「何さ」

「俺は、まだ退学するとは云ってねえっ!!」

源川は暁の両肩を掴んで、其の両肩を揺すりまくった。

「なっ何云ってるの、こっ輝二君!もう、文和さんが退学届出しに行っちゃったよっ!!!!」

「……………えっ??」

暁の思わぬ一言によつて、源川は両肩を揺するのをやめた。
ちなみに、文和さんとは源川の父親である。

「……親父……………が？」

「そうだよ。もう文和さんには一ヶ月前に伝えて『OK!』の返事貰ったから、僕てつきり輝二君も知ってるかと……………」
輝二君？」

源川はショックの余りに、地べたに座る様に意気消沈としていた。

「……………なんて」

「？」

小声で何か話し出した源川を見て、暁は其の言葉を聞き取ろうと、膝を抱える様に源川の前に座った。

そして、源川は周りの人達にも目もくれず、叫んだ。

「退学なんて、御免だああーーーーーっっっ!!!!!!」

・・・・・・・・と。

#3

「俺は自分の人生を、恨んだ……」
（後書き）

お久しぶりですっっ！桜藍ですっっ！！！！

更新遅れましたあ！！本当済みませんっつ（汗

中間テストだったもので……。
(言い訳です。はい)

そして何だ此の駄文はつつつ!!!!!!?? 本当に本当に、

済みません！

こんなんでも、読んでくれたらとても有り難いですっつ！！

感想・誤字等ありましたら、お願いしますっ！！！！

桜藍でした♪

#4 『桜ヶ咲村』（前書き）

久々の更新ですっつ!!
またもや駄文・・・（泣）

#4 『桜ヶ咲村』

ガタツ・・・ガタタツ・・・

塗装された道から砂利道に入ると、黄色い錆び付いたボンネットバスは大きな音をたて揺れ始めた。

其の所為^{せい}か少年・・・源川は顔色を悪くしていた。

「文和さん、輝二君の顔色が悪くなって来ました」

「あれっ本当だ。おい、大丈夫か？」

「・・・・・・・・んな訳ねーだろ。つーか黙れ、此の糞親父^{くそ}（怒」

「おいおい実の父親に何ちゅー口利^きいてんだ。たくつ、小さい頃はあんなに可愛かったのになあ〜」

「本当ですよねえ・・・」

「・・・・・・・・哀れな目で見てんじゃねーよ」

源川は呆れたのか、只面倒臭くなったのか、窓から見える景色を眺め出した。

窓から見える景色は秋にも拘^{かか}らず、桜が満開に咲いていた。

「・・・・・・・・何で、今の時期に桜？」

「あつ、輝二君は知らないんだっけ。此処の地域は一年中桜が咲いているんだよ」

「へえ・・・」

暁の説明を聞いて、源川は感心したのか窓から見える桜をずっと眺め続けていた。

「・・・輝二君、さつきからずっと桜に見入ってますよ」

「あいつは桜は好きだからな。此れで少しでも、機嫌を直してくれれば良いんだがな・・・」

「・・・もう、とつくの昔に良くなってますよ」

「？」

暁の言葉に文和は疑問を持ち、首を傾げた。

「輝二君、何だかんだ云って僕達と話しているじゃないですか」

♪」

「・・・そーだな♪」

暁の一言に文和は納得し、源川と同様に窓から見える景色を眺め始めた。

- - - 其の刹那 - - -

ドドドンッッッ！！！！！！

ボンネットバスが、急に止まった。如何どうやらバス停に着いたらしい。

突然の急ブレーキの所為で、源川は前の椅子に顔面衝突した。
ちなみに暁と文和はシートベルトをしていた為、顔面衝突は免まぬれた。

「あつ着いた。降りるよ、輝二く・・・ん？」

「くっう（泣）」

顔面衝突は、相当痛いらしい。

「・・・文和さん。さっきの言葉、前言撤回します・・・」

「おう、何となく分かった（汗）」

そんな会話をしながら、源川達はボンネットバスから降り始めた。

最後に降りる源川はお金を運転手に渡すと、素早く降りようとした。降りる直前に、

「おう、始めて見る顔だな。また、使ってくれなあゝ」

白髪交じりの髭を生やした運転手が、声をかけてくれた。突然の事に源川は只「はっはあ・・・」と答える事しか出来なかった。

ブウウン・・・

源川が降りると、ボンネットバスはまた砂利道を走っていった。

「何だ、あの人……」

「輝二君、珠洲爺すずと話したの？」

「スズジイ？」

「うん。本当の名前は珠洲斑すずむらさんって云うんだけど、皆は略して『珠洲爺』って云ってるんだ」

「ふうん……」

源川は軽く頷くと、今は小さく見えるボンネットバスを見た。

（何かあの運転手……変なオーラが出た気がしたんだけど……気のせいかな）

「暁ちゃん、此の漢字読んでくれるか？俺、漢字苦手なんだよな！」

「自信満々に云うな。単細胞脳味噌が」

「ちよっ！？流石に酷くなっつー！？（泣）」

ある意味、立場の逆転した親子。

「まあまあ、落ち着いて下さい。えっと、此处はですね……」

「『桜ヶ咲村』って云うんです」

#4 『桜ヶ咲村』（後書き）

どうも！！久々過ぎる投稿をした、桜藍です！！！！

はい、毎度恒例の駄文です。・・済みませんっつ（＞0＜）！！！！
そしてっつ！！！！此処でお礼を云わせて下さいっつ！！！！

私めに評価を下さった皆様っ！！！！&此の駄文をお気に入りに
入れてくれたお方っつ！！！！！！本当に、有り難う御座います！！
！！！！

此れからも、どんどん投稿して頑張って行きたいと思うので、此れ
からも末永く末永く、宜しくお願いしますっつ！！！！！！！！

誤字等有りましたら、お願いします！！！！

桜藍でしたっ♪

#5 『ユメ』

(はぁ・・・はぁ・・・!!!)

走る、

(はぁ・・・っ!!!)

走る、

(はぁはぁ・・・糞^{くそ}っ!!!)

少年は、走り続ける。

(俺に、ついてくんじゃねえっ!!!!!)

得体の知れない者から、

(はっ・・・はぁ・・・!!!)

逃げる、

(だから、ついて来るなっっっ!!!!!!!)

逃げる。

(!!!しまっ・・・)

大木の木の根に、少年の足が、引つかかる。

(・・・・・・・・・・・・・・・・)

無言で少年を見下ろす、何か。

(はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・!!!!!!)

少年の鼓動が、速くなる。

ニユルッ

何処からか、大量の触手が、少年の身体に巻きつく。

(ぐっ!!・・・うあっ!!!!)

少年の、喉に、胸に、足に、

(うっ!!!!うあっ!!!!)

巻きつく。

其の時、

(・・・・・・・・・・けて・・・・・・・・て・・・・・・・・)

(えっ!?)

(た・・・・・・・・で・・・・・・・・くれえ・・・・・・・・)

得体の知れない者が、小声で呟く。

（！！っもしかして、貴方・・・）

名を云おうとした瞬間、

「起きろ――――――――――っ
っっっっ！！！！！！！！！！」

「うわぁっっ！！！！？」

父親である文和に、大声で起こされた少年――源川。

「行き成り大声で、俺を起こすなっ！！！！（怒）」

「何だよ、人が折角親切に起こしてやったのによっ！」

『お早う』の挨拶も無しに朝から喧嘩をする。其れが、源川家。

「まっ取り敢えず、学校に行く準備でもしろ」

「何で？」

「何でってなあ・・・（汗）」

キョトンとした顔の源川を見て、文和は一つ溜め息をつくと軽く淡々と話した。

「今日、お前学校だろっ」

源川にとっては、とても重要な事を。

「・・・其れを早く云えっ！！！！！！」

源川は筆筭に有った新品の制服と教科書の入ったリュックを持ち、慌しく階段を下りて行った。
あわただ

そんな息子の姿を見て文和は、

「・・・・・・・・もうそろそろかな、自分の力に気づくのっ」

静かに呟いた。其の時の文和の表情は、欲しかった物を貰えて喜ぶ小さな子供の様な表情だった。

ボタンッ

玄関のドアを勢いつけて閉めると、源川は目の前に続く桜並木の道を走って行った。

「あああつつつ……！転校初日に遅刻なんて本当^{マジ}ねーだろうつつ……！……！」

云つても意味の無い事を源川は云うと、猛スピードで走って行った。

『ユメ』の事も忘れ、

少年は、

走る、

走る、

まさか、今走っている場所が、『ユメ』で走った場所とは、知らずに。

少年は、学校へ向かった。

#5 『ユメ』（後書き）

二十日ぶりの更新ですっ！！桜藍です♪

いやぁ、昨日は期末テスト最終日だったので、大変でしたねえw
w（言い分けです。はい。）

こんな亀より遅い更新ですが、チマチマと続けていくので！！皆様、
どうぞ宜しく♪誤字等有りましたら、お願いします！！

#6 『廃校寸前高校』

キンコンカーンコン・・・

「ねえねえ、今日から転校生が来るんだって！」

「嘘っ！？此の廃校寸前の高校につ？」

「まっ紀州の情報なんだから、当たってるだろうな」

予鈴のチャイムが鳴った事にも気付かずに、教室にいる生徒達は転校生の話で持ちきりだった。

此処は『村立桜ヶ咲^{おうがさき}高等学校』。村で唯一の高等学校だ。創立百八十年になる此の高校は、代々と何かと凄い能力を持つてる生徒が集まる高校と噂されている。

しかし、其れはあくまで噂。

実際の所、其の高校を卒業した生徒は略村^{はくむら}に残っている。一部の人は上京しているらしいが、特に有名人等になつてゐる訳でもない。其の所為か年々入学率が減少していき、遂には廃校寸前までに陥ってしまった高校。

そんな高校に転校生がやって来ると聞けば、生徒達は其の話に持ちきりになるのは無理は無い。

・・・実は暁が東京に住んでいる腐れ縁にあたる少年・・・源川を無理矢理連れて来たと云うのは誰にも知られていない様だが。

場所は変わり、校庭。

「やべっ！？チャイム鳴っちまったっ！！」

源川はチャイムが鳴った事に気付き、急いで校舎の中へ入って行った。

「えつと、靴・靴……。此处で良いやつ！取り敢えず急がないとっ！」

靴を空いている下駄箱にしまつと上履きに履き替え、源川は教室へと走って行った。

そんな時、

「・・・もしかして、源川君？」

「・・・え？」

突然呼び止められて源川は、後ろを振り向いた。

「やっぱり源川君ねっ」待ってたわ」

「え・・・と、貴女は？」

「あつ御免なさいねっ、私は土佐上総としかずみ。一樣此の学校の先生よ」

「せつ先生！？・・・お若いですね・・・」

「そう？まあ実際、二十歳はたちだしねっ」

「・・・20つつっ！！!?」

先生である上総の年齢を聞き、源川は驚きを隠せなかった。

キンコーンカーンコーン……

同時にHRのチャイムが鳴った。

「あら、チャイムが鳴っちゃったわね。其れじゃあ、行きましようか」

「あ、はいっ」

源川は上総の後に続く様に歩いて行った。

「源川君は、前の学校では何部に入っていたの？」

「えっと、陸上部ですっ」

「へえ……何だか足が速そうね」

「まあ、ボチボチ……」

前の学校では先生に話し掛けられる事は滅多に無かった源川にとつては、上総に話し掛けられるのは恥ずかしくも内心嬉しく思っていた。

「あのっ……此の学校には陸上部は有るんですか？」

「陸上部ねえ……。多分有ると思うわっ」

「多分・・・?」

上総の返答に若干疑問を持つ源川。

「此の学校は色々な部活が有るのは知っているけど、多過ぎて何有るか先生も良く分からないの」

「はぁ・・・(汗)」

開き直っているので、源川は苦笑いを浮かべていた。

(先生って、髪染めてるのか・・・?)

源川は深緑色に染められた上総の長髪を、横目だがジッと見ていた。

「そう云えば、源川君」

「はいっ」

「此の学校、源川君達が卒業したら廃校になるのよ」

「・・・はい??先生、云ってる意味が分から」「源川君、此处が教室よ」

(何気、話を遮ったっ!?)

若干頭の中がパニック中の源川。

「じゃあ、入るわよ」

「はっはい」

上総が教室のドアを開けた瞬間、

パンッ！パンッッ！！！！

「「ようこそっにねんいちくみ弐年壱組へっっ！！！！！！」」

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ？」

突然のクラッカーに対して源川は只、如何云う反応を取ればい
いか分からなかった。

#6 『廃校寸前高校』（後書き）

どうもつ桜藍ですっ！！！昨日に続き、更新させて頂きました♪
まあ所謂『御面返上』と云う奴です。はい。

未だに続く此の話、此れからも皆様宜しくどうぞっ！！！
誤字等有りましたら、お願いします。 桜藍でしたっ♪

#7 『貳年壱組』

「……………えっ……………と？（汗）」

戸惑いまくる源川。

「こら、駄目でしょ。転校生に行き成りクッラッ何て・・・」

上総は一樣生徒に注意をしているが、明らかに怒っていないのが分かる。

そんな上総の注意に、一人の男子生徒が何か話し出した。

「だって、紀州がやろっつて云ったんスよ」

そう云うと、男子生徒は一番後ろに隠れていた少年……暁を指で指した。

「あれ？和、そうだっけ……（汗）」

暁は苦笑いを浮かべながら、男子生徒の名前を云う。

（お前がやらせたんかいっつー！！）

惚^{とぼ}けている暁に対して、心の中で突っ込みを入れる源川。

「まっ、取り敢えず皆席に着いて」

「「はーいっ」「」

皆、其々の席に着いた。それぞれ

「じゃあ、改めて紹介するわね。転校生の源川輝二君。はるはる 遙々東京から転校してきたの。其れじゃあ源川君、自己紹介を」

「あつはい……」

（如何しよう・・・自己紹介なんて、全然考えてねーよ）

自己紹介が有る事をスッカリ忘れていた源川は、ぎこちないが何とか自己紹介をし出した。

「（冷静に、冷静に……！）・・・先程紹介された源川輝二です。自然に恵まれた此の高校で、高校生活を送りたいと思っています。色々と御迷惑をお掛けすると思いますが、皆さん、これから宜しく願います」

一通り紹介を終えると、源川は生徒達に微笑みかけた。

「……………」

「……………大人ねえ」

圧倒的な自己紹介を聞いて殆どの生徒は度肝を抜かれ、上総は開いた口が塞がらない状態だった。

……只一人を除いては。

「そつ其れじゃあ源川君、窓側の後ろから二番目の席に着いてくれる？」

「はいっ（ニコッ）」

源川は上総に云われた通りに、席に着こうとした。
机と机の間を通った時、

「・・・馬あ鹿」

誰かが小声で罵声を吐いた。
そして・・・。

ドカツツツツッ！！！！！！！！！！

「痛っっ！！？」

「手前何てめえ小声で罵声吐いてんだよっっ！！阿呆てめえっっ！！！！！！
（怒）」

小声で罵声を吐いた人物、
暁を見事に殴った源川。
そして源川は気付く。

「・・・っ」

「・・・ククッ」

「プッ」

「アハハハハッッッ!!!」

源川の余りの変わり様に、生徒達と上総に笑われている事を。

「えっ！？」

「アハハ♪輝二君、僕を殴るからだよつ♪」

「うっ煩うざわいっ！！！！／／／／」

(糞^{くそ}っ！完璧恥かいたっ／＼／＼暁の野郎うゝゝ)(怒)

そんな朝から笑いの絶えない此の貳年壱組で、源川は高校生活を送る羽目になった。

— — — — —

場所は変わり、山の中。

ガタツガタンツとボンネットバスを走らせる珠洲爺。

「~~~~~」

口笛を吹きながら運転をする珠洲爺の背後に、何かが近寄ってくる。

其れに気付かない珠洲爺は、今度は歌を歌いだした。
そして、

グサツ・・・!!

「う、っ!!・・・ぐあ!!」

何かの手が珠洲爺の心臓を貫き、身体の中を抉^{えぐ}りまくる。
ボタツボタツと大量の血が流れる。ハンドルは黒から真っ赤に
染まっていく。

何かの手が抜かれると、珠洲爺は床に倒れてしまった。珠洲爺
はもう息をしていなかった。

「・・・やっと・・・見つけた・・・使える・・・
亡骸・・・」

珠洲爺の亡骸を見つめている何かは、悪魔の様な微笑みをして
いた。

#7 『貳年壱組』（後書き）

どうも、桜藍ですっ!!

見事に後半グロく且つ駄文になってしまいましたww（済みませんっ!!!!）

誤字等有りましたら、お願いします♪

#8 『個性のある生徒達』

場所は戻り、教室。

「では、HRを終わりにしたいと思います」

「起立、注目、礼」

「有り難う御座いましたっ」

日直の挨拶が終わると、上総は教室から出て行った。
其れと同時に、生徒達は其々自由な時間を過ごしていた。

「・・・恥掻いた／＼／」

少し頬を赤く染めると、源川は机につつぶした。

「そりゃあ転校初日に、罪の無いとてとんでも可哀想な僕の頭を、殴るんだもんねえ」

「あーかーっきいーっ！（怒）」

恥を掻かせた張本人、暁の声を聞くと源川は怒りを露にし、今にも殴り掛かろうとしていた。

そんな源川を周りの人達は飽きれながらも、二人の喧嘩（一方的な）を止めに入った。

「まーまー、落ち着けよ。お前、色白で細い癖に案外力あるん

だなっ
っ」

「手前、初対面の癖に侮辱してんじゃねーよっ!」

「侮辱なんてしてねーよ。只、長髪フェチの俺にとっては凄く好みだからよっ・もしかしたら、お前の事好きになるかm「其れ位にしとけ、飛驒^{ひだ}」

飛驒と云う少年の若干危ない発言を、癖っ毛のある黒髪の少年によつて止められた。

「何だよ、七海^{ななみ}。転校生の事を褒めてるだけじゃんか」

「「全つつ然、聞こえない」」

クラスメイト全員に否定された飛驒。

未だに飛驒に肩を持たれたままの源川の頭の中は、色々ところや混ぜになっていた。

(・・・何だよ、此のクラス・・・(汗)ついてける気がしない・・・)

「あれ?輝二君、もしかして怖気^{おしけ}ついちゃった(笑」

「一回死んでみる?(黒笑」

「・・・結構でーす」

「(はぁ・・・)おい、取り敢えず其の手を退^どかせ」

「おつ、御免御免」

飛驒が手を退かすと源川は自分の席に座り、小説を読み始め・

ヒヨイツ

・・・ようとした所で、飛驒の発言を止めた七海が小説を取っていた。

「お前なあゝ、普通は僕達の名前とか知りたいとは思わない訳？」

「七海、輝二君は普通じゃないからしょうがないんだよ」

「そうなのか？紀州」

「手前は黙ってろっ晁！！其れよりお前、俺の小説を返」やくだよっ」と

源川は小説を取り替えそうとしたが、七海の方が一枚上手だった。源川の手が小説に触れる寸前に七海は軽くジャンプをし、源川の真後ろに立っていた。

「流石、七海！」

「もつと見せ付けてやれー！！！」

教室は生徒達の歓声でいっぱいになっていた。

」

「転校生君は、一体どんなジャンルの本を読んでるのかなあ」

「！？おいつ中は見るなっつ！！！！！！」

「じゃあ、僕から取り返してみなよっ」

「・・・上等じゃねーか（怒」

七海の挑発に源川は、つい乗ってしまった。

「七海、輝二君は意外としぶといから気をつけてね」

「暁っ！？此の裏切り者っ！！（泣」

そんな事を云いながらも、源川は小説を取り返すのに集中していた。

「久しぶりに見るな、七海の華麗な技達」

「でも転校生君にも頑張っしてほしいなあ」

教室内にいる人達は二人の戦い（？）に見入っていた。

「（ボソツ）君の力、お手並み拝見させてもらおう・・・」

（今、何か云ったか・・・？）

何か声が聞こえたが、源川は気にする事無く小説を取りに返そうと思った。

其の時、

「おつくれました！ーーーーっ！！！！！」

何者かの声で、戦いは一時中断した。

「おいおい神野^{かんの}、良い時に来るなよ」

「KYっ！」

「あはは、御免なさい……（汗）」

（てか、遅刻するなよっ！？）

一人、まともな突込みをする源川。

神野と云う茶髪の少年は皆に謝りながら源川の前の席に座った。

「あれ？転校生か」

「……源川輝二。宜しく……」

「おうつ！よろし……あれ？どっかで聞いた名前……。
しかも誰かに似てる……」

神野は源川の名前を聞くなり、行き成り考え込んでしまった。

「あつ輝二君。此れ、弐年壱組のプロフィール」

「ああ、サンキュッ」

源川は暁から渡されたプリントを、机の中にしまおうとした時、

ガバツツ!!!

突然、神野に抱きつかれた源川。

「なっ！？／／／」

行き成り抱きつかれ、源川は赤面状態になっていた。そんな源川を尻目に神野は源川に向かってこう云った。

y . . 「 やつと再開出来たね . . 俺の M y s w e e t h o n e 」

「ええっ！！？」

「はあっつ！！！！！？？／／／／／」

生徒達も驚いていたが、源川の方がもっと驚いていた。

・
・
・
当たり前か。

#8 『個性のある生徒達』（後書き）

誤字等ありましたら、お願いしますっ!!（><）

桜藍でした♪ノシ

番外1 『プロフィール』（前書き）

前回、暁が源川に渡した紙の内容をそっくり其のまま載せようと思いますっ！！

長くなりますが、其処はあしかわらずに・・・。（文、当てるかな・・・汗）

番外1 『プロフィール』

出席番号1 青崎播磨あおさきはりま 男 17歳

身長・・・173・8cm

性格・・・活発

特徴・・・黒髪の短髪、左側に分け目がある。

特技・・・三味線

部活・・・帰宅部

出席番号2 神野拓也かんのたくや 男 16歳

身長・・・171・0cm

性格・・・勘違い癖がある。

特徴・・・茶髪の短髪、若干癖っ毛あり。

特技・・・サッカー

部活・・・サッカー部

出席番号3 紀州曉きしゅうあかつき 男 16歳

身長・・・156・2cm

性格・・・優しい、たまに腹黒。

特徴・・・オレンジが混ざった茶髪、銀縁眼鏡の真ん丸お目目。

特技・・・ピアノ

部活・・・軽音楽部

出席番号4 九須賀聖呼くすがしょうこ 女 16歳

身長 . . . 165 . 9 c m
性格 . . . 悪戯好き
特徴 . . . 茶髪の短髪、左の前髪辺りだけ肩まで伸ばしている。
特技 . . . 格闘全般
部活 . . . 茶道部

出席番号 5 すおうひなた 周防日向 女 16歳

身長 . . . 157 . 3 c m
性格 . . . 大人しい
特徴 . . . 銀髪、短くツインテールをしている。
特技 . . . 歌を歌う事
部活 . . . 軽音楽部

出席番号 6 するがみみ 駿河美々 女 16歳

身長 . . . 160 . 9 c m
性格 . . . 天然、鳥嫌い
特徴 . . . エメラルド色の長髪、巨乳
特技 . . . 皆を和ませる
部活 . . . 美術同好会

出席番号 7 たちはなくさか 橘日下 男 17歳

身長 . . . 174 . 2 c m
性格 . . . 明るい
特徴 . . . 金髪で天然パーマ、ニット帽子をかぶっている、
斑^{かさ}がある。 そは 雀

特技 . . . 棒術
部活 . . . 棒術部

出席番号 8 千月宮希伊 ちげみやきい 女 16歳

身長 . . . 167 . 2 c m

性格 . . . 活発

特徴 . . . 赤髪の長髪ツインテール

特技 . . . 歌を歌う（特にラップ等）

部活 . . . 軽音楽部

出席番号 9 千鳥夏己 ちづりなつみ 女 17歳

身長 . . . 172 . 9 c m

性格 . . . 泣き虫

特徴 . . . 黒髪のマッシュルームヘア、常に眉毛は下がっている。

特技 . . . 無し

部活 . . . バイオテクノロジー研究会

出席番号 10 遠江大和 とおとうみやまと 男 17歳

身長 . . . 148 . 3 c m

性格 . . . オカマ

特徴 . . . 真ん中分けの長髪パーマ、真ん丸お目目、低音ボイス

特技 . . . 勉強

部活 . . . 帰宅部

出席番号 11 朋刀響 ともはきょう 男 16歳

身長 . . . 179 . 8 c m

性格 . . . 無口、やや短気、不良

特徴・・・赤髪のセミロング、前髪一部黄色に染めてある、ヘビースモーカー。

特技・・・喧嘩、剣道

部活・・・剣道部（殆ど活動無し）

出席番号12 七海甲斐ななみかい 男 16歳

身長・・・163・9cm

性格・・・お気楽

特徴・・・黒髪の天然パーマ、黒縁眼鏡、垂れ目

特技・・・水泳、聖呼の蹴りを避ける事。

部活・・・水泳部

出席番号13 日暮司桜ひぐりつかへん 女 16歳

身長・・・156・0cm

性格・・・明るい

特徴・・・黒髪の短髪、右目が義眼ぎがん。

特技・・・キャッチボール

部活・・・ソフトボール部

出席番号14 飛騨君尋ひだきみひろ 男 16歳

身長・・・169・9cm

性格・・・爽やか、長髪フェチ

特徴・・・黒髪、銀縁眼鏡、イケメン

特技・・・三味線、横笛

部活・・・帰宅部

出席番号15 豊前京平ふぜんきやうへい 男 17歳

身長 . . . 165 . 9 c m
性格 . . . 無口
特徴 . . . 黒髪 of オールドバック
特技 . . . 料理
部活 . . . 帰宅部 (たまに家庭部に参加する。)

出席番号 16 伯馬圭威 ほつまけい 女 16 歳

身長 . . . 164 . 9 c m

性格 . . . 毒舌

特徴 . . . 真ん中分けで一つ縛り、前髪のみ黒髪

特技 . . . 占い

部活 . . . 華道部

出席番号 17 己高和 みたかかず 男 16 歳

身長 . . . 175 . 2 c m

性格 . . . とても短気、不良。

特徴 . . . 金髪、ピアスをつけている。

特技 . . . 書道

部活 . . . 書道部

出席番号 18 美保関テチス みほのせき 女 17 歳

身長 . . . 165 . 2 c m

性格 . . . クール

特徴 . . . 前髪をピンで止めてる、三つ編み。

特技 . . . 運動全般

部活 . . . 帰宅部

出席番号19 山城出雲やましろういずも 男 16歳

身長・・・168.7cm

性格・・・ボケーっとしてる

特徴・・・黒髪、右目に眼帯をしている。(貼るタイプ)

特技・・・三味線、琴

部活・・・帰宅部

出席番号20 月見里海丸やまなしうみまる 男 17歳

身長・・・176.9cm

性格・・・食いしん坊

特徴・・・黒髪のポニーテール

特技・・・大食い

部活・・・家庭部

出席番号21 湯川筑ゆかわちく 女 17歳

身長・・・150.0cm

性格・・・インテリ

特徴・・・ストレートのセミロング、漫画によく出てくる眼鏡、

左側の前髪をピンで止める。

特技・・・蘊蓄うんちく

部活・・・科学部

出席番号22 譲ノ崎風音ゆずりのさきかざね 女 16歳

身長・・・155.1cm

性格・・・世話好き(響以外)

特徴・・・クリーム色で耳の下に二つ縛りをしている、セーラ
ー服。

特技・・・ヨーヨー

部活・・・バスケットボール部

出席番号23 留階導宇宙 男 16歳

身長・・・164・4cm

性格・・・ドジ

特徴・・・濃い茶髪の短髪、前髪を少しだけピンで上に止めて
いる。

特技・・・高くジャンプする事

部活・・・バレーボール部

出席番号24 渡井宙亜羅 女 17歳

身長・・・159・1cm

性格・・・クール、喧嘩っ早い

特徴・・・黒髪のツンツンヘア、長髪の二つ縛り。

特技・・・喧嘩

部活・・・バトミントン部

担任 土佐上総 女 20歳

身長・・・166・0cm

性格・・・優しい、怒ると怖い

特徴・・・緑色の長髪ポニーテール、スタイル抜群。

特技・・・護身術

顧問・・・文化系全般

副担任・保険医 長門安芸 ながとあき 男 21歳

身長・・・181.7cm

性格・・・頼られる、頼もしい。

特徴・・・右目は黒色・左目は黄色、両目に泣き黒子ほくろがある、

眼鏡。

特技・・・学問全般

顧問・・・運動系全般（特にサッカー関係）

庭師 木村生美 きむらいくみ 男 21歳

身長・・・170.8cm

性格・・・大人しい、無口

特徴・・・水色のセミロング、眼鏡、ゴーグルを首に掛けている。

特技・・・物作り

輝二君へ♪

可哀想な輝二君の為に、仕方無いクラスの簡単なプロフィールを書いたよ。

ついでに先生全員のプロフィールも書いといたよ。全く、本当輝二君は駄目何だからっ♪

ハ＊）ノシ

暁（＊ハ

番外1 『プロフィール』（後書き）

はい、桜藍ですよ。

久しぶりの投稿が、プロフィールとは……。さーせんっ↑ライw
ま、見てくれれば話も分かり易くなると思うんで！（保障はしませ
んよ）

長くなりましたが、今回は此处で閉めさせてもらいますっ。

何時もの事なのですが、誤字等ありましたらお願いしますっ！感
想も、待ってますよっ！！

桜藍でしたっ

♪

#9 『気付く筈さ・・・』

「ああ〜オレのHoneyちゃんと、約束を守ってくれたんだね・・・／＼」

若干顔を赤らめながら、神野は机越しにいる源川を更に強く抱きしめた。

抱きつかれている源川はと云うと・・・。

「あ・・・あ・・・っ／＼／＼／」

顔を真っ赤にし、口をパクパクさせていた。

「おいおい、何してんだよ・・・（驚）」

「転校生って、ホモだったの・・・？」

「っーか拓也って、そっちの趣味だったのか・・・（汗）」

突然の事に教室内にいる生徒達は、皆ザワザワと騒ぎ始めていた。

（おいおいおいっっ！！！！／＼如何云う事だよ一体っっ！！！！？）

こう云う時に限って、行動を起こす事が出来ない源川。

「へえ〜。やっぱり輝二君って拓也君と、そーゆー関係だった

んだあゝゝw」

「（はっ！）離れろっど変態つつっ！！！！！！」

ドカツツツ！！！！

「グハツツ！！？」

暁の声が聞こえたのか源川は我に返り、抱きついてた神野を思いつ切り蹴り飛ばした。

「ヒュウ~~~~~・・・（汗）」

一瞬にして、教室内の空気を凍らせた少年・源川。

そんな源川の反応を面白がる暁は空気を壊さぬ様に、教室から抜け出した。

ガラッ

「本当、輝二君は楽しませてくれるねっ♪さて・・・と・・・」

さつきまで見せていた可愛らしい顔とは裏腹に、暁は眉間に皺しわをよせ、教室内とは違う空気が漂う廊下を歩き始めた。

「？あら、紀州君。如何したの？授業が始まりますよ」

「済みません、先生。少し体調が悪いので、保健室行って来ます」

教室に向かっていた上総に話しかけられ、暁は皺をよせるのを

止め、何時も通りの笑顔で話し出した。

「・・・本当は？」

「・・・如何云う事ですか？」

何かを悟った上総は一つ溜め息をつく、目つきを鋭くして暁に問いだした。

「また狩りに行く気ね・・・暁」

「・・・そうだけど？其れが僕の仕事だからね」

「今度は、どの幽霊を」

上総の問いに答える前に、暁は自分の眼鏡を外した。外すと同じ時に暁の目が鋭くなり、一瞬にして暁の周りが殺気に満ち足りていた。そして一言呟いた。

「・・・珠洲爺がいづらに殺された」

「！？あいつらって・・・まさか、もう復活したのかっ！！
！？」

「ああ、今から俺は安芸と一緒に探しに行つて来る・・・もしかしたら、手掛かりが掴めるかもしれないからなっ」

さつきとは、まるで別人になっている暁は、其のまま上総の横を通り過ぎようとした。

「…………源川は……自分の力に気付いているのか？」

通り過ぎようとしている暁を、上総は止めるようにまた暁に問いかけた。

「…………さあ。あの様子じゃあ気付いてねーな」

「暁っ！！それじゃあ、源川を転校させた意味がな」そんな事はねえよ」

「…………？」

「輝二は確かに気付いてねえけど、理事長が云うには『ユメ』を見たからそろそろ気付く筈つと、云っていたぜ。其れに…………」

「其れに…………？」

「…………いや、やっぱり何でもねえ」

そう云い残すと、暁は再び廊下を歩き出した。

「……気を付けろよ、暁…………」

段々小さくなる足音を聞き、上総は小さな声で言葉を呟き、そして上総も教室へと向かって行った。

其の頃の教室内は…………。

「いいじゃあ〜ん、別に抱きつく位さあ〜w」

「嫌だっつ！！！止めんかっ！！！此の変態っつ！！！！！！！」

「オレはHoney限定変態で〜すっw」

「だから、くつつくなあっつ！！！！！（怒」

喧嘩（一方的な）が始まっていた。

そんな時に、丁度良く上総がやってきた。

「コホンッ皆さん、もう授業が始まっていますよ」

「あっ本当だ！」

「さーせえ〜んっ」

上総の一言により生徒達は其々の席へ座っていった。

（やつやつと・・・終わった・・・）

源川は疲れたのか、大きな溜め息をつきながら席に座った。

ポンッ

「？」

「此れ。返すよっ」

何時の間にか源川の横にいた七海が、小説を机の上に置いてい

た。

「あっ・・・」

「忘れてたろ、小説の事。じゃっ」

「あっお前名前は・・・」

呼び止めようとしたが、七海は自分の席に戻って行った。
・・・と云っても、源川の斜め後ろにいるのだが。

「って近!!!」

「あはは、僕は七海甲斐。宜しくなっ」

小声で名前を云うと、七海は前に向いた。

（ナナミ・・・？珍しい苗字だな・・・）

珍しい苗字を不思議に思いながらも、上総の声が聞こえた為源
川も前に向き直した。

#9 『気付く筈さ・・・』（後書き）

あけおめ&お久しぶりですっww桜藍ですよっ♪

はい、何だか怪しい雰囲気になって来ましたよwやっと、作品名らしくなってきた気が・・・（笑）

此处でお知らせですっ！誠に勝手ながら私、受験生の為、暫く小説を投稿する事が出来ませんっ！！本当、申し訳ありません（><）合格したら即再開したいと思いますっ！！申し訳ありませんっつ！！（泣）

誤字・感想等ありましたら、お願いしますっつっ！！！！

桜藍でした（*^ω^*）

#10 『信じがたい・・・』

「・・・・・・・・ここか」

村の奥にある森の中。其処に少年と青年が、荒れ果てたボンネツトバスの中に入っていた。

「!・・・異臭が凄いな・・・・・・・・」

ボンネツトバスの中に入った途端、物凄い異臭が辺りを立ち込めていた。

其の異臭に気付いたのは、先程とは全く別人の少年――暁だった。

「仕方が無い。此れが、アイツ等のやり方だ」

「にしても・・・人間一人の死体の匂いじゃないぞ、安芸」

立ち込める異臭を腕で塞ぎながら、暁は隣にいた青年――安^あ芸^きに話しかけた。

「確かにそうだが・・・・・・・・!?おいっつ」

安芸と云う青年は目を見開き、信じがたい物を見てしまった。

「安芸?如何し「見るなっつっつ!!!!!!」」

暁の目を咄嗟に隠す安芸。

「見ては・・・・・・・・いけない・・・・・・・・!!」

（糞っ！・・・・間に合わなかった・・・・・・・・）

「安芸・・・・？」

「・・暁、此処にはもう・・何も手掛かりが無い」

信じがたい物、其れは・・・・。

「珠洲爺の身体は・・アイツ等に、乗っ取られた」

既にアイツ等に身体を乗っ取られた、珠洲爺だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・最悪だ（泣」

其の頃の教室。

「では皆さん、この席で文句有りませんか？」

「はーーーーー！っ！っ！」

高校生にしては珍しい大きな声で、上総に返事をした。
「……只一人を除いて。」

ガラッ

上総が教室を出て行ったと同時に、教室は一瞬にしてざわめき始めた。

「如何して転校初日に、行き成り席替えなんだよ……」

此の如何にも露骨に嫌がっている少年・源川は、新しい席に顔をいつつぶしていた。

もう分かつていると思うが暁がいなくなつてから今までの間、何故か『席替え』をしていた。

（席替えならまだ良い……。だけど、だけど……！）

「宜しくな、転校生君っ」

「やっぱりオレと輝二は、運命の赤い糸で繋がれているんだね・
……¥¥¥」

「ほな宜しくなあゝ、源川w」

「……宜しく」

「宜しくねっ」源川君」

只でさえ個性なクラスなのに、クラスの中で特に個性の有り過

ぎるクラスメイト達と此れからを過ごす羽目になってしまった。

#10 『信じがたい・・・』（後書き）

お久しぶりです！桜藍ですっつー！！

遂に復帰ですっー！！（遅いわ）私が此処にいると言っ事は・・・。
そう！高校に合格したのですっつー！！！（自慢すんじゃねーよw
w）

と云う訳で、此れできちんと小説を書く事ができます。本当、嬉し
い・・・（ゝωゝ＊）

引き続き、続けていきたいと思いますので皆様、此れからも宜しく
お願いします♪

誤字等ありましたら、お願いしますー！！

桜藍でした（ノ

＊ゝゝ（ノ

#11 『源川争奪戦(?)』

キーンコーンカーンコーン・・・

「其れではHRを終わりにします。湯川^{ゆかわ}さん、号令を」

「はいっ！起立、礼！」

「」「さようならっ！」「」

HRが終わると、皆は其々の時間を過ごし始めた。

「あゝゝ疲れたあ・・・」

一番後ろに座っている若干可哀想な主人公、源川は今日何度目か分からない溜め息をついた。

「（初日からこんなに疲れるなんて・・・。先が思いやられる（汗）・・・よし帰ろう）」

相当疲れたのか、源川は荷物を纏めると席から立ち帰ろうとした。

其の時、

「」「待ったああああ！！！！！！！！！！」「」

「ふん、オレは当然の事をしただけだ。輝二はオレの物だ」黙れつつっ！！！（怒）」

ドカツツツ！！！！！！

神野の暴走を源川は、神野の溝に一発殴っただけで黙らした。周りにいた人達は、

「「「・・・・・・怖ええ（汗）」」」

恐るべし源川。

「手前、俺の事をHoneyって読んでんじゃねーよっ！
！つか、俺は列記とした男だお・と・こっっ！！？！」

意識を失っている人物に怒鳴っても意味無いが、取り敢えず云いたい事を云った源川は肩を上下に動かし、息を整えていた。

「・・・・・・え・・・と、云いたい事は云ったか源川（汗）」

「（前髪をピンで止めてる人物・・・えっと）ああ・・・大丈夫だ、
留階導^{るかいどう}」

源川は暁がくれた（以下略）を見ながら留階導^{るかいどう}宇宙に返答をした。

「んじゃお疲れの所を悪いが、早速バレーボール部に入部してくれっ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はっ？」

留階導の言葉に疑問を抱く源川。

「ちよっ！？ズリイぞ留階導っ！！源川は我が書道部に入部す
んだよ！」

「はあああっっ！！？」

其の言葉に反論をする己高の言葉にも疑問を抱いた源川。

「何ゆうつとんねんっ？ミーナはウチがいる茶道部に入部って決
まっとなるんや！」

「いやいやいやっ！？何云ってるのっ！！てか『ミーナ』って
誰だよっ！！？」

（コイツは確か、九須賀^{くすが}か・・・）

訳が分からなくなっ頭がショートしてしまったのか、源川は
取り敢えず九須賀^{くすが}聖呼に突っ込みまくっていた。

「『ミーナ』は源川のニックネームや！よう覚えときっ」

「何故に女らしいニックネームをつけてるんだよっ？！」

（てか、俺が決めて良い権利は無いのか・・・（泣）

最もな意見を云った源川だが、九須賀達には聞こえてる訳が無
かった。

「・・・帰ろう、うん」

源川は討論を繰り広げているのを尻目に、バレない様に教室から出て行った。

#11 『源川争奪戦(?)』 (後書き)

長らく放置してました！お久しぶりです、桜藍ですっ！！

私が放置をしていた間（放置するな）東北・長野等では大変な被害に遭われました。

被災された皆様に心からお祈りを申し上げます。

一日でも早い復興を願いながら、こんな役立たずな私も何かしら役に立てる様に頑張っていきたいと思います。

感想や誤字等がありましたら、お願いします！

桜藍でしたっ！！

#12 『他愛ない』（前書き）

若干、腐要素あり！注意して下さい。

#12 『他愛ない』

教室から出て廊下を歩っていると、玄関から複数の声が聞こえた。

（誰がいるのか・・・？）

少し不思議に思ったが源川は気にする事無く、玄関へと足を進めた。

其処に居たのは、

「あつ源川あ！今、帰りか？」

「ゲッ長髪フェチ（汗）」

長髪フェチこと飛驒^{ひだきみひろ}君尋がいた。

「何だよ、其の言い方！今朝のは云い過ぎたって謝つただろお
まあ本当の事だから良いけど」

「自分で認めるなっ」

お気楽な発言をしている飛驒に隣にいた眼帯の少年・山城^{やましろいずむ}出雲は鋭い突っ込みをした。

「・・・まあ良いや、じゃあな」

如何でも良いと思ったのか、はたまた他人に無頓着なのか、源川は靴を履き替えると一人スタスタと帰ろうとしていた。

「おいっ勝手に帰んなよっ」

一歩踏み出そうとした途端、山城の後ろにいた青崎播磨あおさきはりまに肩を掴まれ、源川は一瞬よろけてしまった。

「ちょっ！？何すんだよっ！」

「勝手に帰ろうとした源川が悪い」

「はっ？」

「播磨が云いたいののは、『俺達と一緒に帰ろう！』って云いた
いんだよっ」

青崎が云いたい事を上手く弁解した飛驒の言葉を聞き、源川の頭上には？マークが浮かんでいた。

「鈍感だな・・・」

「？」

山城の呆れた言葉に対しても源川の頭上には？マークが更に増えた。

「~~~~っつっつとに分かってねーのかよっ！-」

「だから何がだよっ！？」

「・・・播磨、取り敢えず帰ろうよ・・・」

「・・・・・・・・あつ、俺と一緒に帰ろうって意味だったのか？」

「「其れ以外に何がある」」

青崎達に突っ込まれた源川。

「でも良いよ俺は、また誘つてく」「源川に拒否権は無い」

断ろうとした源川の言葉を遮り、青崎は源川の背中を無理矢理押し、半強制的に四人で帰る事になった。

同時刻、とある森の中

森の木々の神秘的な風景とは対照的に、途轍とてつもない異臭が立ち込めていた。

「はぁ・・・はぁ・・・やっと終わった」

そう云いながら肩で息をしている青年・安芸あきは近くにある大木に背中を預けていた。

「大丈夫か、安芸？」

「ああ多少の切り傷はあるが、問題は無いだろう」

「問題大有りだ馬鹿」

冷たい言葉を放つ少年・暁も安芸と大差ない程の切り傷を負っていた。

「おいおい・・・少しは心配つてものをしてくれよ・・・（汗）」

「今の俺に心配なんてガラでもねえ事してほしいのか？」

そんな悪態をつきながらも暁は安芸の所へ行き、ショルダーバッグから小さい救急箱を出し安芸の体の応急処置を始めた。

「・・・本当、素直じゃないなっ・・・」

「あ、？何か云ったか？」

「いんやぁ別に・・・・・・・・♪」

応急処置をしてきている暁の態度に安芸は微笑ましくなり、優しく笑った。

笑っている安芸を暁は不思議に思いながらも、処置を続けた。

「人の髪を触るな変態」

「ちょ！酷い言い草だなあ（汗）・・・・まあ強^{あなが}ち間違っ
てはいないか・・・」

そう一人でブツブツ呟きながらも安芸は暁の髪を触るのを止める気はなかった。

「変態は認めるのかよ・・・」

「うん認めるよ・・・暁は変態なオレが大好きだもんな♪」

「はっ！勝手にほざいてろっ／＼／」

「顔、赤いよ」「黙れっ／／」

安芸の発言に顔を赤らめた事を指摘されたくないのか、暁は傷が沁^しみる様にわざと消毒をした。

「痛っ！？」

「罰^{ばい}が当たったな（黒笑）」

「そう云う所はあ^っちの暁と何ら変わらないな・・・（汗）」

異臭が立ち込める中、仄^ほかに消毒の匂いが香り、二人の他愛の無い会話が異臭が立ち込める森を穏やかな空気に変えている様に見える。

#12 『他愛ない』（後書き）

お久しぶりです！桜藍です！！

放置した挙句の此の駄文・・・（；ω；）

こんなでも読んでくれたら幸いですっ！！

誤字等ありましたら、お願いします！！

感想も待ってます♪

桜藍でしたっ！

#13 『優しい景色と優しい心』

源川は

「・・・・・・・・ぜえ・・・・・・・・・・・・・・・・ぜえ・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」

大変、不機嫌であつた。

「おつせーぞ、源川。もう君尋達はとづくに着いてるんだぜ
っ」

「・・・・・・・・何だ其の口の利き方は・・・・・・・・（怒」

何故、不機嫌かと云うと、

（何で俺が手前等の荷物を持って山に登らなくちゃいけねーんだ
よっ！）

そう、源川は何故か青崎達の荷物（リュック三人分＆源川の荷物）
を持っていてしかも、帰り道の途中にあつた山に登る事になつて
しまい・・・・・・・・。

今に至る。

「・・・・・・・・なあ疲れたんだが・・・・・・・・」

「おいおい、源川バテるの早くね？此れだから最近の若者は・・

」・

「お前に云われたかねーわっっ！！！てか、お前も若者だろ
うがっ！」

「あゝ煩い煩い。源川って本当、見た目通りの奴だなあ。因みにオレは『お前』じゃありませんっ『青崎播磨』ってちゃんとした名前があるんですっ」

「おまつ・・・あつ青崎、見た目通りの奴って一体、如何云う事だ？」

源川は呼び方を直してから、気になっていた事を青崎に聞いた。

「如何云う事って・・・見た目通り、力無いな〜っと思って」

青崎の一言により、源川の不機嫌さは更に悪化した。

「力無いって云うんじゃないっ！！俺は此れでも陸上部に入部してたんだけだっ！！！」

「へえ〜。・・・全然、部活やってたとは思えないなあ」（笑）

「笑うなっ！?!」

源川の見た目からにして意外な事を知った青崎は、最初は小さくだったが最終的には大きな声で笑い出した。

「お〜〜いっ！笑って楽しんでる所を悪いんだけど、そろそろ急いの方が良いぞーっ！！！」

遠くの方で飛驒の申し訳なさそうな声が聞こえてきた。声を聞くと青崎は笑うのをピタツと止めた。

「おっもうそんな時間か。源川、急ぐぞ！」

「えっ？急ぐって・・・うわっ！？」

源川は何か何だか分からなかったが、青崎が源川の右手首を掴むと急に走り出した。

急な上り坂を難なく登っていく青崎を見て、少しだけ凄いと源川は思ってしまった。

「はいっ到着！」

頂上に着くと一気に視界が晴れた。

「っ・・・うわぁ・・・」

源川は目の前の景色に、つい見惚^{みと}れてしまった。

其の景色は、一面に広がっている芝桜が丁度よく夕日と重なって、本来の色に夕日の橙色が綺麗に映えていた。

夕日に映える芝桜。さっきまでの不機嫌さは何処へやら。都会で育っていた源川には、とても印象的に残る景色になった。

「凄えだろっ、此の景色。オレが見つけたんだぜっ！」

「違っだろ、播磨（汗）あんな源川、本当は出雲が見つけたんだっ」

青崎の嘘を否定し、飛驒は山城の肩を叩きながら本当の話を話した。

「ちよっ！？ネタバレすんの早えーよっ！？！」

「^ま先ず、其れ以前に嘘つくのを止めろよ」

山城は青崎に的確な突っ込みをした。そんな感じにギヤアギヤアと討論しだしていた。

「・・・綺麗だな」

「だろっ」此の景色の事、実はまだクラスの人達は知らないんだっ」

「え・・・そうだったのか？」

飛驒の口から意外な事を聞き、源川は少し驚いた。そして源川には一つの疑問が出来る。

（・・・何で、学校生活を長く過ごしているクラスの奴らより先に、転校してきたばかりの俺なんかに見せようとしたんだ・・・？）

目線は夕日に向いたまま、源川は飛驒に疑問を投げかけた。

「なあ、飛驒」

「んっ？」

「・・・何でクラスの奴らには見せないで、転校してきたば

つかの俺なんかに見せようとしたんだ？」

源川の疑問に飛驒は、いとも簡単に答えを出した。

「親友になつたから」

「・・・はっ？」

飛驒の答えに関して源川は開いた口が塞がらなかった。

「おっおい！俺は今日、転校してきたばかりなんだぞっ！親友な訳ある筈」
「日数なんか関係ないよっ」

「・・・？」

飛驒は淡々と話を続ける。

「播磨や出雲、七海に神野・・・クラスの皆、源川と『親友』になりたいって思ってるんだよ。其れで源川を此処に来て良かったって喜んでもらうには・・・と思い玄関で話した結果、此の景色を見せるって事になったんだ」

話に一区切りをつけると、飛驒は源川に向かって笑顔を向けた。

（あっ・・・だから玄関に溜まってたんだ・・・）

「・・・俺なんかの為に・・・？」

心に思っていた事が自然に口に出してしまった。

其の問いに飛驒は頷き、隣で討論していた青崎と山城も其々に

頷いた。

(・・・・・・・・やばい、目頭が熱く・・・・・・・・)

三人の気持ちに対して源川は感慨無量になった。今にも嬉しくて涙が溢れそうだ。

「?如何した、源k「なっ何でもないっつ!」」

山城の言葉を遮り源川は自分の荷物だけ持つと、足早と山を下ってしまった。

「おいっ!?!待てよっ源川!」

青崎達も源川の後を追う様に山を下っていった。

(何時以来だ・・・身内以外で、あんなに優しくしてもらったの・・・・・・・・)

足早と下る源川の頬には汗ではなく、一滴ひとしずくの温かい涙が伝っていた。

#13 『優しい景色と優しい心』（後書き）

どーも！久しぶりな桜藍ですっ！！

今回の話は少し感動もん目指してみましたが・・・撃沈↑

駄文が更に駄文になっていきますが、読んでくれたら幸いです！！
誤字等ありましたら、お願いします！

感想も待ってます♪

桜藍でしたっ（*・ω・）ノシ

#14 『謎の声』

日が沈み、鳥達も山へ帰って行く姿が見られ始めた。
源川の家からには夕食の良い匂いが漂っていた。

「~~~~~」

鼻歌を歌いながら源川の父・文和は多種多様な料理を作っていた。

「きよ~~~~はああ~~~~こお~~~~じのお~~~~大好きなあ
あ~~~~カレーライスウウ~~~~だつよお~~~~んっ」

上手いとは程遠い歌声だが文和は、そんな事は気にせず『今日の夕食は何だろな?』（文和作詞・作曲）を歌い続けた。

ピンポーンッ

そんな時、突然チャイムが鳴った。

「何だあ折角、輝二の大好きなカレーの隠し味を入れようとしてたのにい」

四十代のオジさんが使うには止めてほしい口調を堂々と使いながら、文和は手を軽く洗い玄関へと向かって行った。

「はぁーい！どちら様で……あれ？」

玄関を開けたが文和の視界には真っ直ぐに繋がっている一本道しかなく、チャイムを鳴らした人物は何処にも見当たらなかった。

「おつかしいな……確か、チャイムは鳴った筈……？」

不思議に思いながらも文和は料理の続きをしようと台所へ戻ろうとした。

だが――――

「……………た……………」

「……………あ？」

謎の声が聞こえ文和が後ろを振り向いた瞬間、

ドシュッ！

突如、現れた得体の知れない者に腹を切り裂かれていた。

「やべっ！？遅くなった！」

山に登ったり寄り道をしたりして思いの外、帰るのに時間が掛かってしまい源川は走るスピードを上げて家路へと足を進めた。

「親父、怒ってるかな？常時チャランポランな癖に夕食の時間は守らないといけないとか・・・考えが読めないと云うか何と云うか・・・（汗）」

考えていても、もう直し様が無いのだが源川は何時も常時チャランポランな父親に悩まされている様だ。

家へと繋がる一本道に入り、あと少しで家に着くと思い始めた時だった。

「・・・け・・・・・・・・・て・・・すと・・・・・・
・・・」

「・・・え？」

何処かで聞いた声が聞こえると源川は足を止め、辺りを見渡した。

だが辺りを見渡しても人影一つも無い。

（さっきの声……何処かで………？）

謎の声について考え始めた源川。

其の後ろには、人間の形を辛うじてしている者が立ちはだかっていた。

其の者の手には真新しい血の色に染まった短刀が……。

#14 『謎の声』（後書き）

お久しぶり過ぎた！！！桜藍です♪

パソコンが故障しておりまして、最近やっと直って小説を更新する事が出来ましたああああ！！！！

久しぶりの所為か駄文が更に駄文に・・・OTL

更新が亀よりも遅いですが、此れからも宜しく願います！

誤字等ありましたら、願います♪

桜藍でしたっ（*^ω^）ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1132o/>

Ghost buster !!!

2011年10月7日12時38分発行